先づ自動車に依つて地方の產業を開發し、然る後鐵道を敷くと云ふ方がごれ位經濟か知れぬ。二重の經費を要するこの疑を生ずるかも知れんが、道路は何も自動車許りが走るのではなく、如何なる僻陬の地方こ雖も必要缺くべからざるものである。鐵道が開通したから道路が不要になつたこ云ふ例はなく、寧ろ鐵道こ共に益々道路が必要こなつて來るこ云ふ狀態ではないか。鐵道の效用は說く迄もないが、道路を忘れるやうでは文明は成り立たぬ。地方民が鐵道を要望するのは當然であるが、苟も國政整理の任に當るものは、想を國家の現狀に呈し緩急宜しきを得るの政策を執らねばならぬ。それこも汽車の走る雄大さを見て感嘆の聲を發するの類ならば吾々又何を云はんやである。何れにしても道路は鐵道の先に進むべきものであつてこれ迄の如き鐵道偏重政策を改むべき秋が來たものこ云はねばならぬ。

折焚く柴

一

拙著「津輕舊事談」に、貞傳上人と云ふ傑僧が、遠い火災を消した話を、少しばかり書いて置いた。貞傳上人は陸奥東津輕郡今別村、本覺寺といふ淨土寺の五世に座つた僧である。いろいろな奇特を示して、享保の昔津輕、松前の俗信を一身に集めた傳說界の一人であつたが、ある時觀念修行の座から急に立上つて、寺の門に頻りと水をかけ始め

中道等

た。寺の人々不思議に思つて、何をして御座ると問うと、貞傳答へていふには、今京の智恩院が火に捲かれてどうも消し兼ねて居るから、斯うしてこゝから鎭火の御手傳へをして居る處だと。聞く人狐につまゝれた形であつたが、此の上人の申す事故、並居る人々も懸命に門へ水を灑いて加勢した。時過ぎて智恩院から使者が來て、大火の節防火の働きをして貰うてまことに辱いと細々と禮を述べて立ち去つた。里人始めて上人の偉いことを、今更のやうに驚嘆したと云ふ事である。

似た話は陸前松島の瑞巖寺にも殘つて居る。曾て此の寺の住持となつた唐僧覺滿禪師、或る時僧徒を集めてしきりに庭前の石へ水を掛けさせた。皆々不審に思つて其の譯を聞くと、答へて曰く、唐土徑山寺に火災あり。依つて我れ水の印を呪してこれを救ふのだと。その後果して徑山寺から禪師へ書を贈つて助力を謝し、禮として一箇の鈴を送つて來た。寺では之を防火鈴と名づけ、鎭火の靈物として崇めるのみならず、近頃迄每年の大晦日の夜、この鈴を鳴らして里を過ぐる、その音を聞かぬうちは、歲取り膳の箸を採らぬことゝする慣習であつた。又水を掛けた石も、寺內圓通院の前の畑中に轉がつてあり、長さ五尺、幅一尺五寸で傍に「鎭火石」と札を建て、其の石の傍にはこの禪師の墓まで添へてある。

こんなに遠く迄會通する話は、昔から何處にもあつたと見え、干寶の搜神記には支那の話が書いてある。樊英と云ふもの壺山に隱れて居たが、ある時暴風の西南から起るのを見て、學者に向つて、成都市上に今火災があつて甚しく熾んだと云つた。因て水を含んで之を噀いだ。其の時日を推し測つて後、蜀から來た者の詞を聞くと、果して此の日大火事あつたが、東から雲の起つたと見る間に大雨となり、さしもの大火も遂に滅したと語つた。こゝでこの男の不思議な達見に吃驚したとある。此の一條は又琅邪代醉篇卷の二十一に稍〻文章を變へてその儘揭げられて居る。餘程有名な傳譯であつたと見える。代醉篇には、樊英の外にも一人、同じやうな火を救つたことが例として載せられた。光武帝

ある時南郊に幸したが、光禰勳郭憲、忽東北に向つて酒を含んでは三度も吐きかける、執法奏レ爲二不敬一、詔あつてその故を問ふと對へて曰ふには、今齊の國が失火してござる故にかうして防いでやつて居るのであると。後、齊果して火あつた。而も南郊でやつたと同日であつた云ふ。この二つには貞傳や覺滿のやうに有難かつたと禮に來た話は無いが定めし充分感謝したことであらう。

酒を含んで吐き出したのが雪となり雨となつても、尙臭かつたと云ふ素敵な話が、まだ支那に殘つて居る。同じく成都の火に因緣を持つものと見え、晉の葛洪が書いた神仙傳卷の五に、欒巴徵尙書郎となつた時のことゝしてある。大淸一統志二百三十七には東漢の順帝の時、尙書を稱すとあつた。正月元旦の大會に、巴後れて來り、百官酒を賜つたが飲まず、西南に向つて一々之を吐いた。一同不敬ではないかと詰ると、巴卽ち飲まぬ理由を一段のべてから、さて適ま成都市上の火を見る、臣故に酒を嗽いで之を救はんとす、敢て敬せざるに非ず、詔に對して虛を吐いたなら大罪に當るからと云ふ。驛書を出して成都に問うて見ると、正旦に火を發して大に危なかつたが、須臾にして大雨三津東北から來て火乃ち止む、而もその雨、人の衣に着くと、どうしたことか大に酒氣が有つた云々。

佛僧の佛圖澄にもよく似た話が一つある。澄曾て石虎と共に中堂に昇る。澄忽驚曰、變々、幽州が火事だ。消してやらうとて酒を灌いだ。久しくしてから笑つて漸ゝ助けてやつたと。あまりの不思議さに石虎が人を遣つて調べて見ると、幽州での云ふことには、その日火從二四門一起、西南有二黑雲一來、驟雨滅レ之、雨亦頗有二酒氣一云々。これもやつぱり雨に酒氣が交つたと答へたのであつた。單なる御禮の言葉よりは此の報告の方がずつと面白味の深い話である。

酒も水も用ひず、只咒願したのみで遠い火を消して了つたのは釋尊であつた。祇園精舍が燒ける時、思ふことが屆くなら消えて見よと咒しただけで火忽ち滅盡したと、十誦律毘尼序の下に見えて居る。高僧傳の類には、よく火の業で佛法弘通を試みたことが載つてあるから、軈て大千世界

を觀破する話の、至て卑近な例として、こんな寺僧達識の經驗談として我が國へも擴がつたものであらう。然し獨り火災ばかりでなく、觀念修業精進の樂には、さまゞゝな姿が見えるといふから、やたらに妄誕として退けるわけに行かぬ、探し出してから一つ考へて見たいと思ふ。

二

吹雪のする夜、晩餐のあとで人々へ自分の知つてゐる限りの、和尚と子僧の話を聞かせてから、恰も自分迄が和尚になつた氣分でいろいろな事を考へ出した。

賢い小僧のために和尚がやりこめられた話の中で、内田邦彦氏の『南總俚俗』を見ると、あの地方にはこんな話が殘つて居る。

寺の小僧、餅を甕の中に入れて土中に埋め、其の上にしるしをして置くとてしこたま糞をした。明くる朝起き出て見ると、雪が降つて一面に白くなり、昨日のしるしも何處やら見えぬ。因て小僧とりあへず口吟した。

雪降りてしるしの糞も見えざれば、
　二つの餅は何處にあるかな。

と。和尚是れを聞いて、こら小僧何と云つた、もう一度云つて見ろ。そこで小僧又、

雪降りてしるしの石も見えざれば。
　我がふた親の墓は何處かな。

和尚はほとほと感心し、その褒美として澤山餅を與へたと云ふ。

又或る日小僧を獅子舞を見にと逐ひ出してから、其のあとで和尚餅を圍爐裡の灰に並べて燒いた。フウフウと音して旨さうに柔かになつた頃、外から小僧が歸つて來た。和尚大に慌てゝ件の餅を灰の中に埋めて隱した。小僧や獅子舞ひはどんな樣子であつたか、と問ふと、小僧火箸を取りあげて、こんな風にピヒャラとてお獅子は舞ひましたと、爐中をかき廻し、おやおや此處にこんなものがありましたとて餅を突き出した。和尚餘儀なく食べよと云つた。

和尚ある日小僧の居睡りしてゐるのを見、爐で餅を燒き

始めた。やけた頃フウフウと灰を吹いたところ、小僧眼をパツチリと開き、和尚さん何御用ですかと聞いた。別に呼びはせぬが、さう言はれて見れば仕方がない、まあ餅でも食べるがいゝと云つた。尤も此の時の小僧の名前がふうふうと云ふのであつたとある。

此の南總俚俗の前の話は、丸で一休の少年時代を再び追想させるやうないゝ物語りであるが、後の二つは、大低何處の國でも大に知られ且つ語られる普遍的のものであつた。

こんな種類の物語りは、文書に殘つた古い筆としてはあまり澤山も見えぬやうであるが、處を別にし、品を異にして到る處に行き亘つた話で、而も和尚と小僧の話だけでも、近頃すでに一卷の本として世間に表はれた程、數が多いのである。和尚も小僧も、およそどんな陬隅でも普通に見つけて居り、從つて話の糸口からするすると耳に溶けて、その上巧妙な變化を、無數に殘し行べき性質であつたから、幼少な時でも愉快な印象の一つであつたに相違ない、それが未だに斯うして電燈の下に語られて居るのである。

和尚は何故か概ね旨く甘いものを人に示さずして貯へ、小僧がそれをこつそりとせしめて、問ひ詰められて言ひ譯する頓智が、思はず人を感服させたのが多かつた。最後の勝利はいつも小僧であつて、難しく云ふと、根本的性質が五十が五十、百が百まで全く同じやうな名目の說話なのである。之から話の筋が豐かに且つ至つて面白く變化して行くのであるから比較的似た話が多い、假令ば和尚が、之は毒だから食つてはならぬぞと云ひ含めて貯へた壺の物を、試みに小僧喰べて見ると、素敵に旨い。皆食ひ盡してからの言ひ譯は、大切な茶碗を壞して申譯がない處から、死ぬ覺悟で壺の毒を喰べたところ、なかなか死ねずに困つてゐますと泣いて居る。或は又和尚の留守の間に悉皆食つて、食ひ殘しを佛壇の金佛の口の邊りに塗りつけて置く。歸つて來た和尚の問ひに答へて、先刻から金佛が騷ぐやうですから、もしかするとあの金佛が食つたのかも知れませぬ。和尚怒つて金佛を叩くとくわん。くわんと音がする。食はんと云ふことがあるか、とて金佛を前の泉水へいきなり投げ込む

と、底の穴から水の這入る音が、くつた、くつた。

松風に圍繞された閑かな山寺などには、こんな話の一つ二つは造作もなく生れさうな氣がしてならぬ。たとへば一休禪師の腕白時代に、果ては狂雲と號したやうな抑へ切れぬ心の持主が、事毎に大人をやり込めた頓智などは、既に一休一口噺などの本となつて、大人を始め曾てこの少年に嗤はれた人の子孫までが、尙哄笑しては眺めて居るのである。落語家が或はこれを種本とした時代の、必ずあつたことさへ我々に想はせるのである。寺に茶釜を賣り込む味などは、たとへ文福茶釜の普通化した故と云はずとも、得て氣の利かぬ和尙の失敗談であつた。ましてこの話に、あの釜に化けた獸は何だらうと不審する和尙の問に答へて曰く、それは狸に相違ない、包んだ風呂敷が八丈だから、抔と笑はせると、賢い小僧が變に惡賢く生れて來るのである。

佐々木喜善君の「江刺郡昔話」などには、奥北の類似が豐富に書かれて居る。陸中江刺郡の和尙と小僧とは、どちらも賢明な者であつた。しかも最後の勝利は和尙が占めて居る。小僧ある時知らずに鬼に誘はれ、頓智を以て深山から逃げ出し、寺へ飛び込むと鬼に追ひつかれて櫃の中に隱れる、餅を燒いてゐた和尙と鬼との智慧比べとなつて、和尙の言ふ儘にだん〳〵、小さくなり、鬼が芥子粒ほどに化けた時、燒餅につけて喰はれて了つたといふ類の話、別系して曾呂利の鬼退說とも言はれる筋と同じものであつて、而も此の間には澤山の要素があつて、簡單でないだけ筋が面白く、比較の差も遂には面倒になつて行くのである。

千篇一律に、下の者が上の者を馬鹿にして大に嘲笑する話は、必ずしも小僧ばかりでなく、たとへば家來と主人、弟子と親方、番頭と旦那と同じやうに傳へられるが、何故に又獨り小僧のみが廣く世間の隅々に迄行き亘つて居るかは。卽ちこの說話の印度臭いところから、一變形として寺に止まつたものだと、今は故人となつた高木敏雄氏などは斷定した。(日本說話の印度起源に關する疑問明治三十四年三月號帝國文學所載)印度說話の主人とは多く獅子と豹であり、これが歐羅巴に入り、從つて主人公が狐などに化

けて、百獸の王でもいつも智慧が足りず、從者にしてやられる話、之れに道德的傾向までが加味されて、遂にイソップの物語りにまで侵入して了つたとも見られるのである。

兼好法師の徒然草に書いた兒法師の話なども、似たものが印度にあり、それを少々作りかへたに過ぎぬと、穿鑿好きの馬琴が「玄同放言」で見得を切つた。故意の作り換へではなくとも、既に僧祇律などにある如き一編の話が、決して共通に語られ且つ播かれたもので、何れが源かは一寸類話の蒐集ばかりでは勿論斷定が出來ぬ。しかし亞細亞や歐洲にあるところの動物說話と、普通のこの小僧談と比べて見ても根本の性質ではすこしも異つて居らぬ。動物が人格化して了ふ迄の間は、人の想像するほどそんなに遠く長いものではなからう。然しこれが一の譬へ話として道義上から冷然と見られるやうになつたのは、既に大なる變化であつた。

江刺郡昔話の小僧が鬼に追はれて逃げる途中、懷中の守札に敎へられて、一枚づゝ投げて大きな川にしたり、又桃の木にしたりする段取りは、すぐさま神典たる記の大神が黃泉比良坂へ逃げて來られた話を、思ひ出させるものであつて、桃太郎の對鬼が島の關係から、桃はすでに避邪の主要物と、論衡に載つて居る性質をも考へさせられ、此の支那と印度の話が、かくも縺れ込んだ影響が互に散らばつて居る分子を、詮その物が却て無言のうちに語つて居のるは、見遁しがたい一點であつた。

兎も角いろ〳〵に變化して行く道筋には、やはり古來から流れて來た民族固有の要素が、多分に基調となつて居るのは重大な點で、且つ探索の大にむづかしい事なのである。たとへば寺の緣起などに、哀れに書かれた賽の河原の子供なども、決して遠いあの世の菩薩のみの勢力範圍ではなかつた。昔はもつと深い意義を持ち、而も寺とは何の關係なしに特殊な行事をしたる日本の古俗であつたのである。それが、後生を願ふ心とともに念佛車を作つて笊などを提げると、もう佛臭く變つたのである。夢より美しくそして哀れな物語りとして、寺とは離れて何處か邊鄙な土地では傳

へられて居るかも知れぬ。小僧と和尚との話から、說話の變形を考へて、昔の俗信を尋ね出す研究などをするのは、所謂世渡りには迂遠な閑人の仕事だと笑はれるであらう。

しかしこんな迂遠な人々でなければ昔のほんとの話の面影を、聞くことの出來ぬのを、少しばかり殘念だと思つてゐるのである。

松本學氏の退官

K T 生

幹事として隨分本會の爲に活躍して貰つた松本學氏は、鹿兒島縣知事として薩南の地に令名を謳はれたが、這般行はれた地方長官の交迭に方つて休職を命ぜられ、官途を退かるゝことゝ爲つた。

氏は溫厚篤實の士であつて、自己宣傳に浮身を窶すやうな、近世式タイプの排斥者、當世稀に見る英國式紳士であることは今更說明する迄もない。

內務省にあるの時は、本會理事佐上信一氏の後を襲つて道路課長となり、次で港灣課長河川課長と言ふ風に、內務省土木局の各課に長となつて隨分手腕を振つたものであつたが、轉じて神社局長となり靜岡縣知事を經て鹿兒島縣知事となつて、在職一年で今回休職となつたのである。